HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	中国の怪獣〈野人〉と〈水怪〉 : 現代中国を徘徊する妖怪イメージ
Author(s)	中根, 研一
Description	ISBN: 9784938637491
Relation	共産圏の日常世界. 望月哲男編
Citation	スラブ・ユーラシア研究報告集, 1, 149-155
Issue Date	2008-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/47680
Type	departmental bulletin paper
File Information	SEP1_013.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

中国の怪獣〈野人〉と〈水怪〉

―― 現代中国を徘徊する妖怪イメージ ――

中　根　研　一

はじめに

私が発表で扱ったのは、現代中国で「目撃」されるという、謎の怪獣〈野人〉と〈水怪〉についてである。それぞれ中国版の雪男、ネッシーとでもいうべき存在であるが、しかしその目撃談として語られるストーリーや形象は、古代から語り継がれてきた伝承や、山や水辺の妖怪の物語のモチーフを踏襲したものであった。かつて「妖術を使う神怪」であった存在は、現代という時代に合わせ、「特種能力を持つ未発見の動物」という新たなアイデンティティを付与された形で、「再発見」され、語られるようになっていったのである。

発表では、そのようにして「蘇った」現代中国の怪獣たちが、どのようなイメージで描かれているのかを、各種図像資料を用いて概観し、また、それらが中国の庶民にどのような形で受容されているかを紹介した。

1.〈野人〉像

現代〈野人〉騒動

現代中国の〈野人〉騒動は、1974 年 10 月に湖北省神農架林区で、発生し、三度にわたる国家レベルの調査隊を送り込み、〈野人〉報道は各種メディアで大々的に報道され、中国内外の耳目を集めた。1980 年の調査隊を最後に、国は〈野人〉調査から手を引き、ブームは徐々に終息していくが、アマチュアの調査組織が結成され、現在に至るまで地道な活動を続けている。また、〈野人〉という特殊な存在に想像力を刺激された作家たちによって、小説や漫画など、様々な創作作品が生み出されている。その中には、後に中国人初のノーベル賞作家となる高行健の舞台劇脚本『野人』（1985）も含まれている。

統合され、再生産される現代の〈野人〉イメージ

新しいアイデンティティを得て蘇った現代の怪獣は、様々なメディアに取り上げられ、一般へ浸透していくことになる。その際に大きなインパクトを与えたのは、その想像図である。【図 1】は、上海華東師範大学の生物学者（当時）の劉民壮が、目撃証言を元に描いたイラストで、騒動後、初めて一般に発表された〈野人〉図である。【図 2】【図 3】は、日本のテレビ局の取材に応じた際に、その場で描き上げたもの、【図 4】はアマチュア組織である〈野人〉調査研究会の内部資料に添付したイラストである。いずれも長髪で前傾姿勢、唇を剥いて笑うような表情を作り、右手で髪をかき上げるようなしぐさで描かれている。

このイラストは結果的に、その後の現代〈野人〉イメージを決定づけてしまった。右手を挙げる長髪〈野人〉像は、やがて劉民壮の手を離れ、異なる絵師たちによって模写され、様々な媒体で再生産されていくことになる【図 5 ～ 8】。もともと古代伝説にルーツを持つ〈野人〉の形象は、図像として描かれ、配付されることでさらにそのイメージを強固なものにし、神農架の未確認動物を表す一種の「記号」として、以後流通していくことになったのである。

前述の通り、一連の〈野人〉騒動は、その後様々な創作作品を生むことになるが、そこで描かれた〈野人〉たちも、やはり、劉民壮が描いた〈野人〉像を踏襲した姿であった。SF 小説の挿し絵として描かれた【図 9】は、実際にはヒマラヤの雪男を描いたものだが、中国人の絵師にかかると、やはり髪の長い姿として表現されるのが興味深い。子供向けの連環画（漫画）の【図 10】は、擬人化が進み、男女差や年齢差を出すためのアレンジを加えられているものの、基本的には同様な描かれかたをしている。

現代〈野人〉像の中の記憶

女性の〈野人〉の場合に乳房を大きく描くのも、よく見られる特徴である。たとえば【図 11】は 1988 年発行の〈野人〉と人間の恋愛をテーマにした小説を複数収めるアンソロジー本の表紙だが、人間男性を小脇に抱え、髪をなびかせ、後ろを振り返りつつ疾走する大きな乳房の女性〈野人〉が描かれている。また、【図 12】は、1998 年に深圳市博物館で開催された〈野人〉博覧会のポスターであるが、その形象といい、姿勢といい、驚くほど【図 11】に酷似している。両者に影響関係があるかどうかは不明であるが、このような髪を振り乱し、乳房を揺らして走る〈野人〉イメージというのは、遥か昔に描かれた、もうひとつの図版を想起させずにはおかない。それは明代、王圻（おうき）撰『三才図会（さんさいずえ）』に収める、その名もずばり「野人国」の絵【図 13】である。全身毛むくじゃらで長髪、左肩越しに振り返りながら、走っているように見える。大きな乳房が描かれているが、しかし上の説明文によると、これは男の〈野人〉である。男性の乳房は瓜のように長く、走るときは手で担ぎ上げるという。この古典的な形象を現代の絵師がトレースしたと、短絡的に結びつけることには慎重にならなくてはならないが、乳房の大きな疾走する〈野人〉を描くとき、ある共通の形象になってしまうという事実は、興味深いものがある。

2.〈水怪〉像

「天池怪獣」騒動と現代〈水怪〉の誕生

〈野人〉と同様、現代中国で「未確認動物」として興味の対象となっているのが〈水怪〉である。現代において「水怪」といえば、ネス湖のネッシーのような首長竜や恐竜の生き残りといった「未確認動物」として認識されるようになってきている。その発端となったのが、1980 年に始まる「天池怪獣」騒動である。1980 年 8 月 23 日、北朝鮮との国境地帯にある長白山のカルデラ湖・天池で、複数の気象観測員が、湖面を移動する二頭の「怪獣」を発見。神農架の〈野人〉のケースと同様、その実在を補強すべく、主に肯定派の人々によって過去の伝説が引き合いに出されたりもしたが、いささかこじつけ的な印象は否めない。

分裂する、あるいは統合される〈水怪〉像

「天池怪獣」騒動の際にも、様々な目撃報告が寄せられ、想像図が描かれている。しかし、〈野人〉のケースと異なり、その形象は統一性を欠く。ただ、証言の中の形象は、竜や牛といった「伝統的な水怪像」を踏襲したものであった。

現地にある長白山自然博物館の中には、一連の騒動を紹介した「怪獣伝説展示コーナー」があり、そこでは目撃証言に合わせて作られた再現写真（フェイク）【図 14 ～ 17】や、ハリボテの怪獣像【図 18 ～ 19】が展示されており、現代の水怪がどのような姿で描かれるかを考察する上で興味深い資料を多数提供してくれている。

しかし、このようにバラエティに富んだ形象は、一部の人間たちの手によって徐々に統合されるようになった。1993 年、長白山のマスコット・キャラクターとして「天池怪獣」が選ばれたのである。怪獣は「吉利」という固有名詞（愛称）を与えられ、デザイナーによってかわいらしくデフォルメされた形象【図 20】は、各種土産物などに印刷され、流通していった。様々な目撃情報で語られた特徴を取捨選択し、最終的に決定したその姿は、古代の首長竜そのものであった。1995 年にはキャラクター展開第二弾として、「天池聖獣」の置物が制作、発売された【図 21】。ここにおいて、「怪獣」はとうとう「聖獣」に昇格し、さらには「地元民によって吉祥の神と崇められている」という、それまではなかった新たな伝説まで付け加えられてしまった。

3. 娯楽として消費される現代怪獣の物語

新しいメディアへの露出

以上のように、新しいアイデンティティを与えられて現代中国に蘇った怪獣たちは、今もなお様々な場で取り上げられ「徘徊」し続けている。小説や漫画などの題材に取り上げられるといった現象は、〈野人〉〈水怪〉ともに、騒動直後の 1980 年代から現在に至るまで頻繁に見られたが、近年ではテレビ特番や、市販のビデオ CD や DVD、果てはインターネットといった、現代ならではの新しいフィールドにも、盛んに出没するようになっている。

1997 年には〈野人〉をテーマにしたビデオ CD（その実体は神農架の観光 PR）が発売されて話題になったが、この廉価なメディアへの登場は、〈野人〉の認知度を大いに上げることに貢献している。近年は、国営テレビ放送である中央電視台（CCTV）の人気科学番組「走近科学」でも、〈野人〉と〈水怪〉はたびたび特集を組まれている。これらの番組の主旨としては、取材で得たデータなどから、あくまで科学的にその正体を推測し、視聴者を啓蒙しようとするものだが、大仰なナレーションで再現ドラマを煽ってみたり、証言に基づいた怪獣の姿を最新のコンピューター・グラフィックスで再現して見せたりと、かなりショーアップされ、娯楽性に富んだ作りになっている。番組はその後 DVD 化されて発売されたり、地方局での再放送がおこなわれたり、書籍化されたりして、繰り返し人々の眼を楽しませている。

中国の経済発展が育む怪獣物語

このような現象は、中国におけるメディアの発達もさることながら、経済発展を背景にし

た富裕層の出現とも無関係ではないだろう。デジタルカメラやビデオカメラ等、最新の電子機器が普及すると、観光旅行の際の必須アイテムと化し、その結果、大量の〈水怪〉写真や映像が生まれることとなった。そして、それらはすぐに怪獣を語るテクストとともにインターネット上にアップされ、情報交換がおこなわれるのである。たとえば、2005 年 7 月には、「天池怪獣」目撃報道が新聞やネットで相次いだが、それに触発された人々が、過去に天池旅行をした際に撮影した写真などを再検証し、改めてその中に怪獣の影らしきものを発見するという現象が多発している。このようにして、怪獣を巡る物語は増幅していくのである。

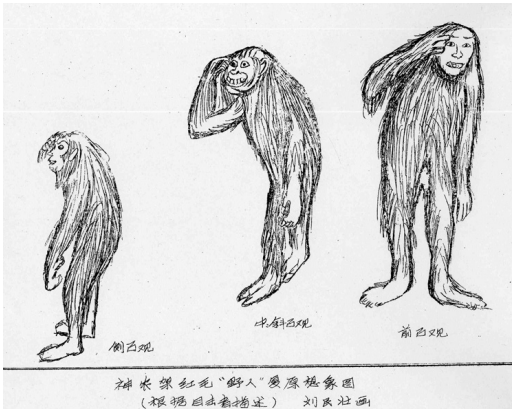
現代中国の怪獣たちが徘徊するのは、山や湖の中だけではない。書籍、新聞、雑誌、観光土産、テレビ、DVD ソフト、インターネット……。日常的に接する様々なメディアに、怪獣にまつわる言説や図像が氾濫し、主に富裕層の人々が、その情報を娯楽として享受している。中華人民共和国成立直後、まだ国内が不安定だった時代には、怪獣にまつわる風説の類が厳しく統制されていたことを考えると、隔世の感がある。

伝統的なモチーフを保持しつつも、最新のメディアの中で育ち続ける怪獣の物語は、おそらく今後も現実と空想の狭間を漂いながら、生き残り続けていくであろう。

根据考察及目击者的描述
所绘制的"野人"形象

【図 1】劉民壮「沿着奇異的脚印―鄂西北山区“野人”考察」（『百科知識』1979 年第 2 期所収）掲載の絵。

【図 2】（左）フジテレビ特別取材班／宇留田俊夫、南川泰三『ドキュメント野人は生きている　中国最後の秘境より』（サンケイ出版、1981）巻頭扉絵。
【図 3】（右）同 162 頁掲載の絵。



【図 4】『神農架“野人”科学考察論文集』（華東師範大学生物系自然弁証法教研室・進化論教学グループ印刷、1982）掲載の絵。

【図 5】江廷安・雲中龍『“野人”尋踪記』（陝西人民出版社、1983）。

【図 6】陳人麟『神農架“野人”古今談』（神農架“野人”夢園、1996）の表紙。

【図 7】陳済衆『野人探踪』（江蘇少年児童出版社、2000）の挿絵。

【図 8】「神農架“野人”夢園」に展示されているパネルに描かれたイラスト。

【図 9】童恩正「雪山魔笛」（『世界最高峰上的奇跡』少年児童出版社、1979）の挿絵。

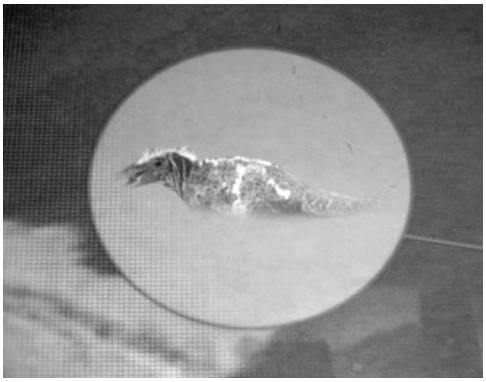
【図 10】連環画、郝仲平原作、海嘯・善琨挿絵『野人之謎（全集）』（中国三峡出版社、1996）の一コマ。

【図 11】紫楓編『野人求偶記』（中国民間文芸出版社、1988）の表紙。

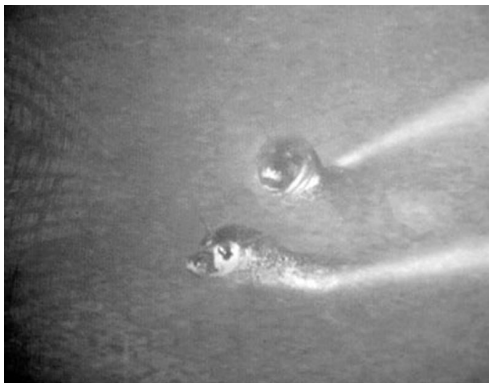
【図 12】深圳博物館で 1998 年末に開催された「神農架“野人”秘踪大展」のポスターのイラスト。

【図 13】明代、王圻撰『三才図会』に描かれた「野人国」の記載と図版。

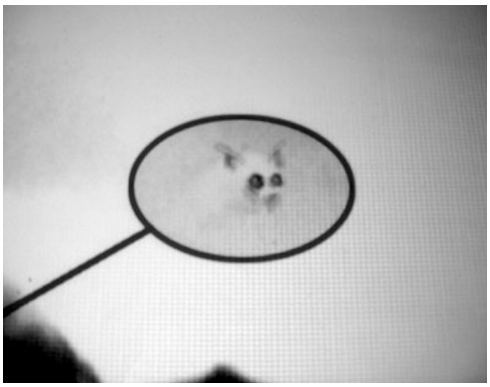
【図 14】長白山自然博物館内の写真パネル。牛型。



【図 15】長白山自然博物館内の写真パネル。恐竜型。

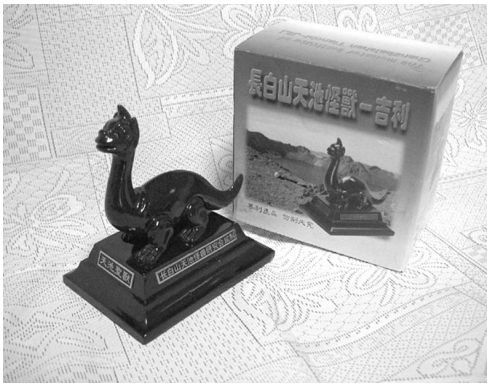


【図 16】長白山自然博物館内の写真パネル。アザラシ型。



【図 17】長白山自然博物館内の写真パネル。犬型。

【図 18】（左）【図 19】（右）長白山自然博物館内の天池怪獣像二種。



【図 21】「天池聖獣」の置物。

【図 20】長白山観光のマスコットキャラクター「吉利」。吉林省長春集郵公司、長白山天池怪獣研究会、吉林省長白山国家級自然保護区管理局『天池怪獣之謎』（出版年未記載）より。